# 思い出せない日付

## ——中国共産党の記念日

石川　禎浩（いしかわ・よしひろ）

京都大学人文科学研究所准教授。一九六三年山形県生まれ。京都大学大学院文学研究科（現代史学）修了、京都大学博士（文学）。京都大学人文科学研究所助手（一九九〇年）、神戸大学文学部助教授（一九九七年）を経て、二〇〇一年より現職。専攻は中国近現代史・東アジア関係史。中国共産党の歴史、および同党の歴史認識の問題を主に研究している。主な著作として、『中国共産党成立史』（岩波書店、二〇〇一年）、「中国共産党第二回大会について――党史上の史実は如何に記述されてきたか」（『東洋史研究』第六三巻一号、二〇〇四年）、「死後の孫文――遺書と紀念週」（『東方学報』京都、第七九冊、二〇〇六年）、『初期コミンテルンと東アジア』（共編著、不二出版、二〇〇七年二月）など。

## 「七二」と呼ばれる記念日

中国には記念日が多い。特にその記念日が、ある歴史的事件の起こった日付にちなんで呼ばれるケースが少なくない。日本でも、五・一五事件や二・二六事件のような例があり、近くは二〇〇一年のアメリカでのテロ事件が「九・一一」と呼ばれたりするが、こうした日付で呼ばれる事件の数では、中国は他の国にひけをとるまい。一月に、「一・二八」（一九三二年に起こった第一次上海事変）があれば、二月には「二七」（一九二三年に起こった労働運動への大弾圧事件）があり……といった具合で、それぞれの月にこういった記念日が数個はある。これだけでも、中国の近現代の歴史が、激動につぐ激動であったことがうかがわれよう。日本でも比較的知られているものといえば、五月四日の五四運動や六月四日の六四事件などを挙げることができる。周知のように、前者は、一九一九年に北京の学生たちが中心になって巻き起こした愛国運動、後者は一九八九年に起こった民主化運動の弾圧で、学生たちの陣取る天安門広場が武力で制圧されたのが六月四日であった。

こうした記念日が、その歴史的事件の起きた正確な日付で呼ばれているのに対して、本稿で

とりあげる七月一日、つまり「七一」の記念日は、その日付が実際にある事件の起こった日付ではないという少々奇妙な記念日である。「七一」とは、中国共産党の創立記念日にほかならない。中国では、誰もがこの日を共産党の創立記念日と考え、実際この日は休日でこそないが、毎年各地で党の記念行事が盛大に行われている。中国共産党の機関紙『人民日報』には、この日に党の誕生〇〇周年を記念する社説が必ず載るし、党指導者の重要な演説が七月一日を期して発表されることも珍しくない。最近では、二〇〇一年のこの日に、当時の党総書記であった江沢民が、共産党への入党条件を私営企業の企業主などにも広げていく、という党の路線を大きく変えるような演説を行って注目された。「七一講話」と呼ばれるその演説は、まさに中国共産党創立八〇周年の記念日に行われたものである。このように、党にとっても、もちろん党員にとっても、七月一日は大変に重要な記念日なのだが、それがどうして実際の日付とズレをきたしてしまったのか。それをさぐっていこう。

## 第一回大会の記念館

先に、「七一」とは中国共産党の創立記念日だと書いたが、その場合の創立日とは、具体的にいえば、党の第一回全国大会が挙行された日ということになる。中国共産党が秘密裏に最初の党大会を開いたのは、一九二一年七月のことで、現在の研究では、「七一」ではなく、七月

二三日に上海のフランス租界で第一回大会が開幕したことが確認されている。この経緯は後でくわしく述べるとして、その第一回大会当時、中国全土の共産党員は、わずかに五十数名にすぎなかった（五三人とも、五七人ともいわれる）。

今年（二〇〇六年）の「七一」の『人民日報』によれば、現在の中国共産党の党員数は七〇〇〇万人強である。一三億といわれる中国の人口からみれば、たしかに一部分ではあるが、イギリス、フランスの人口がともに六〇〇〇万ほどであることを考え合わせれば、その大きさがうかがえよう。さらに我が国を比較にとれば、一億二〇〇〇万ほどの人口のうち、その労働人口は半分強の六五〇〇～六八〇〇万人だから、中国の共産党は、早い話が、日本で働いている人たち全部が党員であるというような、文句なしに世界最大の政党なのである。わずか五十数人の小グループが、八十数年を経て、名実ともに中国を支配する巨大政権党へと成長を遂げたのだから、その出発点は、それがどんなに小さなものであっても、やはり記念に値するわけである。

「七一」記念日のもとになった最初の党大会がどのように記念されているかを知るのに、最も手っとり早いのは、上海市内にある「中共一大会址記念館」（図1）を見にいくことであろう。「一大」とは第一回全国代表大会のこと、「会址」とは会場史跡のことである。第一回大会が開かれた建物は、人民共和国成立後に復元され、現在も記念館として開放されている。かつてフランス租界の閑静な住宅街にあったその建物群は、その周辺の街区一帯が瀟洒な租界風建

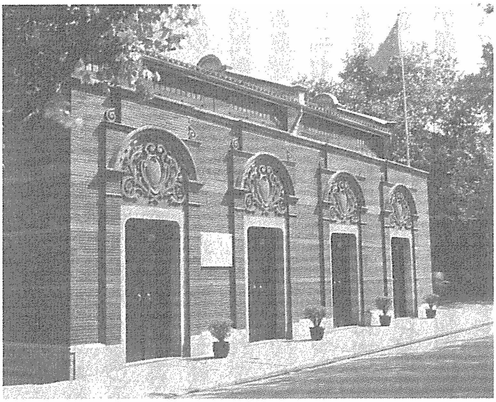

図1

築様式を色濃く残しているという理由で、近年大がかりな再開発が進み、現在では「新天地」というおしゃれなショッピングモールに変貌している。一大会址記念館はその一角に埋もれてしまっているようにもみえるが、内部の展示はこれでなかなか充実している。中でも、最も人目を引くのは、党大会の模様を再現した蠟人形コーナー（図2）であろう。

蠟人形コーナーには、この大会に参加した一三人の中国人党員と二人の外国人（当時、中国共産党を指導する立場にあったコミンテルンからの代表）、合わせて一五体の精巧な蠟人形が、立って何かを報告している毛沢東をとりまく形で配されている。毛沢東は第一回大会にも参加した古参の党員なのである。ただし、当然のことながら、大会当時の様子の写真などは残っているはずもないから、これは想像力を発揮して、それらしく再現したものにほかならず、毛沢東がこんなふうに堂々としていたかは、誰にもわからない。ただ、一三人の中国人参加者については、全員の顔写真が残っており、その後に有名になった人もいるので、ちょっと中国の歴史に通じている人なら、「なるほど」と感心

するような出来に仕上がっている。面白いのは、二名の外国人のうちの一人で、ニコリスキーという名のそのコミンテルン代表は、実は顔写真すら残っていないにもかかわらず、それらしい人形が場に連なっているではないか。記念館の館長さんがこっそり教えてくれたところによれば、蝋人形のニコリスキー氏は、共産党の結成を題材にしたテレビ・ドラマで、たまたまニコリスキー役を演じた外国人俳優をモデルにしたのだとか。これには恐れ入った。

図2

このニセ者蝋人形の笑い話が暗示するように、共産党結成の意義が強調されればされるほど、記念館などそれを記念する側は、共産党の結成にまつわる細部まで明らかにするよう期待され、その結果、こんな捏造に近いことまでやらざるをえなくなるわけだが、それに通底するある種の作為こそは、「七一」を生みだしたものだった。具体的にいえば、一九二一年の第一回大会のその時、その大会の開幕日がよもや後世にこんなにも大きな意味をもつ日になろうとは、大会の参会者はきっと誰も思わなかったにちがいない。ところが、図らずもそうなった時、

あるいはそうなりつつあった時、あの日の出来事を記念しなければならなくなった。そして、記念するには、誰かがあの日の日付を思い出さなければならなくなった、少なくとも、記念日をしかじかの日に決めなければならなくなったのである。それは、第一回大会の参加者が後半生に課せられた責務であった。

## 第一回大会参加者たちのその後

現在、上海の記念館には、第一回大会に参加した一三人の中国人党員の顔写真が、その略歴とともに展示してある。序列なるものが共産党の中で重きをおかれるのと同じ理屈で、この一三枚の顔写真の配列にもそれなりのわけがある。まず、一三人を上下に大きく分かつのは、その人が終生共産党員たることを貫いたか、それとも途中で党を離れたかという線引きである。また、終生党員組は、中国共産党や革命運動にたいしてどのような貢献をしたか、によってさらに区分けされ、一方、離党組は離党の経緯や中国の人民にどのような貢献をしたか、によって、これまた微妙な序列がつけられている。今、その序列を各人の没年と合わせて表にすると次のようになる（表1）。

付言すると、この序列は固定的なものではなく、中国国内の政治情勢の変化や歴史研究の進展にともなって、若干の変動がみられる。さて、共産党の第一回大会に参加した一三人の当時

**表1　中国共産党第1回大会（一大）出席者のその後**

| | | |
|---|---|---|
| | | 1949年 |
| 毛沢東 | (1893-1976) | ———————— 共和国主席 ——— 病死 |
| 董必武 | (1886-1975) | ————————— 共和国副主席 — 病死 |
| 何叔衡 | (1876-1935) | —————— 戦死 |
| 陳潭秋 | (1896-1943) | ———————— 獄死 |
| 王尽美 | (1898-1925) | ——— 病死 |
| 鄧恩銘 | (1901-1931) | ————— 刑死 |
| ------ | ------ | ------ |
| 李　達 | (1890-1966) | — 1923離党 ————— 再入党 — 迫害死 |
| 李漢俊 | (1892-1927) | — 1923離党 —— 殺害 |
| 張国燾 | (1897-1979) | —————— 1938離党 ————— カナダで病死 |
| 劉仁静 | (1902-1987) | ———— 1929離党 —————————— 事故死 |
| 包恵僧 | (1894-1979) | ——— 1927離党 —————————— 病死 |
| 陳公博 | (1890-1946) | — 1923離党 ———— 刑死 |
| 周仏海 | (1897-1948) | —— 1924離党 ———— 獄死 |

の平均年齢は二八歳弱だったが、この表をみてもわかるように、その一三人がその後にたどった後半生は、実にさまざまだった。中華人民共和国成立の一九四九年時点で生存していた者は六名だが、同年一〇月一日に天安門楼上で開国式典を見届けることのできた者、すなわち党の指導者として建国の日を迎えられたのは、わずかに毛沢東と董必武の二人にすぎない。何叔衡、陳潭秋は共産党員であることを貫き通したために命を落とし、王尽美、鄧恩銘は若くして一人は病死、一人は共産党員である嫌疑で捕まり、処刑された。李達はいったん離党したものの、人民共和国成立に合わせるように再入党、一方、李漢俊は離党した後も革命運動に献身したため、それがもとで殺されている。それゆえに、この二人の李は、離党組ではあるが、終生党員組に近い扱いを受けていることになろう。

一方、張国燾は一九三〇年代まで毛沢東と肩を並べる党の大幹部だったが、路線闘争・権力闘争に敗れ、一九三八年に脱党、後に海外に亡命した。劉仁静は、一九二〇年代末からトロツキストの活動を始めることになる。同じく革命を掲げながら、スターリン主義の中国共産党とは激しく対立することになった。包恵僧も、革命闘争のなかで離党し、その後は共産党を弾圧する国民党系の仕事をした。この三人の下に位置づけられているのが、陳公博、周仏海の二人で、彼らは日中戦争勃発の後、汪兆銘（汪精衛）が南京に親日政権を樹立した際に、それに協力、有力閣僚となった。戦後、いわゆる漢奸（民族の裏切り者）として責任を追及され、陳は刑死、周は獄死、という最期を遂げている。彼ら二人は、離党者として党を裏切っただけでなく、民族をも裏切って日本の手先になったということで、最も下位に置かれているわけである。

このように、一三人それぞれがたどった一生を簡単にふり返ってみるだけでも、二〇世紀中国の歩みがいかに波瀾に満ちていたか、そしてその波瀾が一人一人の人生の上に、いかに重くのしかかったかということが、まざまざとうかがえよう。

この一三人のうち、その後半生において、かすかな記憶の中からあの大会の日付を正確に思い出すという使命を負わされたのは、生きながらえて一九四九年以降に中華人民共和国で暮らすことになった人々だった。具体的にいえば、董必武、李達、包恵僧、劉仁静の四人である。この四人は、その後、開催日をはじめとする党の第一回大会の模様を、共産党の歴史研究部門からくり返しくり返し尋ねられるという運命に見舞われることになった。このほか、たしかに

毛沢東も第一回大会の参加者で、人民共和国で暮らした人には相違ないが、最後には神の如くになったその扱いは別格中の別格であるから、四人と同列に論じることはできない。

## 「七一」の由来

現在、公式に七月一日と定められている中国共産党の創立記念日は、そもそも、いつ、どのような経緯で制定されたのだろうか。実は、現在、中国共産党も第一回大会開幕の正確な日付が「七一」ではないことを確認しており、さらに七月一日が党の創立記念日になった経緯についても、いくつかの研究論文が書かれている。それによれば、「七一」の由来は次のようなものであった。すなわち、一九三八年の五月から六月にかけて、毛沢東が延安（陝西省北部の共産党の根拠地）で行った講演「持久戦論」の中で、「七月一日は中国共産党創立の一七周年記念日であり、この日はちょうど抗日戦争の一周年にあたる」と述べ、それが七月一日に共産党の機関誌『解放』（四三・四四期）に掲載されたのが、共産党の創立と「七一」とを結びつけた最初の事例である、と。

この講演の中で、毛沢東が共産党の創立記念日を抗日戦争の記念日と並置していることからもわかるように、当時、中国共産党は、抗日戦争の只中にあった。民族の生死をかけたその戦いのさなか、それもその勃発一周年に合わせる形で、共産党の創立記念日がもちだされている

ことは、なかなか興味深いことだといえよう。抗日戦争に人々の力を結集させる。そしてそのさいに、できるだけ共産党が核となる形でその力を結集させる。これが共産党の創立記念日を抗日戦争記念日とセットにして設定した戦略的ねらいではなかったかと考えられる。

ところで、毛沢東は「持久戦論」の中で、七月一日は抗日戦争の一周年にもあたる、と述べているわけだが、これは厳密にいえば正しくない。周知のように、日中全面戦争は一九三七年七月七日夜のいわゆる「盧溝橋事件」(中国では、これも日付にちなんで、「七七事変」と呼ばれることが多い)を発端として始まったものだからである。共産党の創立記念日と違って、「七七事変」の方は、それこそ七月七日に起きたということは、当時でさえ確定的な事実だったから、これは毛沢東が日付を間違えたのではなく、彼が便宜上その日付を共産党の記念日である「七一」に引きつけて両者の意義をともに強調したのだ、と考えるほうが自然であろう。現に、延安での一連の記念行事は、その年の七月一日から七日まで、「記念週」として挙行されている。

ともあれ、毛沢東の一九三八年のこの講演が中国共産党の創立記念日を「七一」とした最初のものなのだが、これは、第一回大会の開催日を特定できるような資料が当時はまったくなかったため、おおざっぱに七月頃に開催されたといわれていたその日付を、毛沢東が、董必武ら当時延安にいた他の関係者と相談のうえ、とりあえず月初めの一日に設定したのだといわれている。その意味では、毛沢東が講演の中で、「七一」を党が創立された日(つまり大会の開催された日)ではなく、あくまでも党創立の「記念日」であると述べたのは、「記念日」と史実の

日付が異なる可能性があるという余地を残しておいたもの、といえなくもない。ただ、通常の感覚でいえば、第一回大会の参加者でもある党の指導者毛沢東が、特に説明を加えることもなく、「七月一日は中国共産党創立の一七周年記念日」と述べたのだから、それは七月一日に党の創立に関わる何らかの出来事があったと受けとめられたであろう。

## モスクワでの創立記念行事

中国での研究は、「七一」が記念日になった経緯を、おおよそ以上のように伝えるのだが、党の創立を記念するという気運は、実はそれよりも二年も前、つまり一九三六年には、すでに起こっていた。折から党は創立一五周年の節目を迎えていた時のことである。これ以前にも、共産党は、歴史的な大事件の日付に合わせて、○○事件××周年と銘打って活動することはあったが、党の創立自体を記念するということはなかった。したがって、創立記念ということだけでいえば、一九三六年のそれに触れておかねば、不充分であろう。ただし、ほとんど知られることのないその動きは、中国国内ではなく、はるか離れたモスクワで起こったものだった。

一九三〇年代後半にパリで出版されていた中国語の雑誌に、『救国時報』というものがある。中国共産党系列の雑誌ではあるが、その原稿は中国共産党の駐モスクワ代表の人たちが作り、流通の便のためにパリで印刷・発行されるという国際的な刊行物（五日に一度発行）だった。

新聞仕立てのこの雑誌に、一九三六年の七月二五日、「中国共産党成立十五週年紀念」なる社説が載り、同日の紙面に「中国共産党成立一五週年を記念して、全国で祝賀行事挙行」なる見出しの記事が掲載された。その記事は、六月二三日の上海電を引く形で、「昨日の紅色中華通訊社の報道によれば、党中央はすでに、本年八月七日に中国共産党成立一五周年記念のために、全国各地で式典を行う準備をすることを決定した」と伝えていた。記念日が七月一日でもなく、七月二三日でもなく、八月七日になっているのが興味深い点である。

だが、この記念日を祝う行事は、中国国内ではまったく行われた形跡がない。記事は、「党中央」が決定したと伝えているが、当時、都市部の党組織は壊滅状態、「党中央」はあるにはあったものの、いわゆる長征をようやく終えて、何とか陝西省北部の農村地帯にたどり着いたばかりで、とても「全国で祝賀行事」を行えるような状態ではなかった。彼らが記念行事をするようになるのは、前にも述べたように、その二年後のことである。

中国国内の共産党組織に代わって、このような党の創立記念行事を企画立案できるのは、『救国時報』の事実上の編集部、つまりモスクワにいる共産党の駐在代表たち以外には考えられない。具体的な名前を挙げれば、コミンテルンを後ろ盾にして党幹部にのし上がったとされる王明、あるいは第一回大会の参加者で、おりからモスクワにいた陳潭秋らである。彼らは、一九三六年の夏が中国共産党の第一回大会から数えてちょうど一五周年の節目にあたるのに着目、うまく連絡のとれない中国国内の「党中央」になりかわって、創立記念行事の主導を図っ

たものとみられる。

ただし、ここでも問題になるのは、記念日の日付である。モスクワにいる彼らとて、第一回大会の開催日時を特定できるような資料を持っていなかったという点では、中国国内の毛沢東らと大差はなかった。頼みの綱は、モスクワ滞在中の陳潭秋の記憶だが、一五周年に合わせて回想録を執筆した陳潭秋は、第一回大会の討議の模様をかなり詳述したものの、こと日付に関しては、大会のために参加者が集まったのは、「一九二一年夏」「七月下旬」、大会が開かれたのは「七月末」と述べるにとどまっていた。一五年も前のことだから、このあたりが人間の記憶力の限界というところだろう。

では、彼らが設定した「八月七日」とは何の日か。中国共産党の歴史にくわしい者なら、それが一九二七年の「八七会議」、つまり八月七日に漢口で開催され、党の路線転換を決定した有名な会議にちなんでいることに、容易に気づくはずである。一九三六年当時の共産党の路線が、大まかにいって、この「八七会議」の路線の流れをくむものであったことを考えあわせるならば、「七月末」とされる第一回大会の日付に、暦のうえで近い党の吉日は、「八七」になるのである。『救国時報』が、「八月七日」に創立記念行事が行われると報じた理由は、これ以外には考えられない。

先にも述べたように、この年の八月七日に何らかの記念行事が中国国内で行われた形跡はまったくないが、この記念日を発議したモスクワの中国共産党員たちが記念式典を開いたこと

は確認できる。その記念式典での陳潭秋の挨拶の記録が残っているからである。ただ、その記録にも挨拶の日付は抜けていて、行事がモスクワのどこで、具体的にいつ行われたのかはわからない。記念日発議の経緯からすれば、当然にそれが八月七日であった可能性は極めて高いだろう。モスクワの共産党員たちがこの記念行事にかなり力を入れたことは、陳潭秋のほかに、モスクワ駐在の党員の代表格である王明とコミンテルンの幹部ディミトロフが、ともに十五周年を記念する文章を発表していることからもうかがえる。なかでも興味深いのは、「中共成立一五周年と中共新政策実行一周年を記念して」という副題と共に発表された王明の文章（「中国の独立、自由、幸福のために奮闘」『救国時報』一九三六年九月一八日）のほうである。

王明の文章の副題は、共産党の創立を祝うのは、それが一五周年という大きな節目にあたるからだけでなく、それが「新政策実行一周年」とセットになっているからだということをハッキリと示している。「新政策」とはいうまでもなく、一九三五年八月一日に発表され、これまたその日付にちなんで「八一宣言」と呼び習わされているものである。正式名を「抗日救国のために全同胞に告げる書」という「八一宣言」は、中国共産党の政策が、抗日民族統一戦線に転換したことを告げるもので、表向きは中国共産党中央の名義だが、実際には王明ら在モスクワの中共代表団が起草・発表したものであった。これの発表一周年と合わせて共産党の創立を祝うというのだから、王明にとっての党創立記念日——彼は文章の中で「今年の七月末、八月初」は「中国共産党一五周年」であると述べ、第一回大会の正確な日付が確定できないことを

暗に認めていた――は、それ自体というよりも、それとともに祝われる「八一」なり「八七」なりと関連づけられて、初めて意味をもつものだったということができよう。それはちょうど、先の毛沢東らの打ち出した一九三八年の創立記念日が、同じく第一回大会の厳密な日付を確定できなかったため、抗日戦争の記念日との組合せで選定されたことと、同じ思考様式から出ている。

## 党の歴史書

延安に根拠地をおく中国共産党が「七一」を創立記念日とし、提灯行列などさまざまな祝賀行事をするようになった一九三八年は、共産党にとって、日本軍との厳しい戦いをくり広げる一方、民衆の支持を背景に自らの存在感を増しつつある時期でもあった。地方政権であることに変わりはないが、今や共産党の根拠地は、抗日戦争と国共合作体制のもと、中央政府(国民政府)にも認知されていた。共産党は、もはや「共産匪賊」よばわりされる謎の武装集団ではなく、逆に人々にその姿や歩みを正しく伝える努力をするよう迫られていた。一九三〇年代の後半に、毛沢東が外国人ジャーナリストのエドガー・スノーと会見して自らの半生を語ったり、共産党自身が党の歩みを歴史書にまとめるようになるのは、こうした時代状況を背景としている。

第一回大会の史実に密接にかかわる党の歴史書ということでいえば、その一九三八年には延安で、中国共産党の歴史をまとめた本が出されている。中国現代史研究委員会編の『中国現代革命運動史』である。この本は実際には、党の指導者である張聞天が執筆・編纂したと言われているもので、中国共産党による早い時期の準公式歴史書といってよい。同書は第一回大会に関して、「一九二一年七月、中共は一大を召集した」と記していた。七月あたりに大会を開いたことは確認できるものの、当時はそれ以上の具体的日付はわからなかったということが知れる。こうした曖昧な部分を便宜的に補ったのが、この年の毛沢東の「七一」だということはすでに述べたとおりである。

一九三八年以降、共産党は「七一」を党創立の「記念日」として祝賀行事をするようになるが、それが毎年くり返されるにつれ、「七一」は単に記念日であるだけでなく、党が実際に誕生した日であるという理解（誤解？）に転じるのは、ある意味で避けられないことだった。ましてや共産党自身も、一九四一年に出した記念祝賀についての通達の中で、「本年の『七一』は中共が誕生して二十周年にあたる」と述べ、知ってか知らずか、そうした理解を助長していたくらいだから、それが歴史書に盛られるのは、時間の問題だった。

中国共産党の責任ある人物が執筆したもののなかで、七月一日に党が誕生した、つまり七月一日に党の最初の大会が開かれたと明記したのは、蕭三の「毛沢東同志的初期革命活動」（『解放日報』一九四四年七月一日）が最初である。その若き日に毛沢東の友人でもあった蕭三は、中

国共産党の文化工作幹部として著名で、中共党員の手になる初めての毛沢東伝『毛沢東同志的青少年時代』（新華書店、一九四九年）の著者としても知られる。その「毛沢東同志的初期革命活動」は、「一九二一年七月一日、中国共産党は上海で第一回の成立大会を開催した」とハッキリと述べていた。ここにいたって、「七一」は単に記念日であるだけでなく、共産党が最初の大会を開いた日となったのである。

かりに、中国共産党が抗日戦争、あるいはその後の国共内戦で敗れていれば、七月一日をめぐるそれまでの経緯は、あるいは小さなエピソードとして歴史の闇に消えたかもしれない。だが、現実には、中国共産党は抗日戦争を戦い抜き、ついで国民党との内戦に勝利して、一九四九年に中華人民共和国という国を打ちたて、数億の人口を有する中国を指導する党になった。当然に、党のそれまでの歩みについても注目が集まり、一般民衆はおろか、党員さえ実はよく知らない自党の歩みを、わかりやすい形で公表する必要に迫られた。建国直後に刊行された胡華『中国新民主主義革命史』（一九五〇年）と胡喬木『中国共産党的三十年』（一九五一年）は、そうした期待に応えるために刊行された公式歴史書の代表というべきものである。

この二つの著作を見ると、いずれも、「七月一日に中国共産党は上海で第一回大会を開いた」という記述がなされている。ついに、蕭三の記述は公式の歴史書に採用され、誰が読んでも、七月一日は第一回大会が開催された日だという読み方しかできなくなったのである。これより三十年間、中国ではこの説が堅持されることになった。

いったん定説ができあがると、それが一人歩きして、人々の常識を縛ったり、さらには、逆に歴史の真相を覆いかくしたりしてしまうことはよくある。元来、記念日にすぎなかった「七一」が、一九四〇年代を通じて、共産党の最初の大会の日付にすり替わってしまったため、中華人民共和国では、本来、定説に先だつはずの歴史資料や関係者の回想録がその「定説」に符合するように改変されるという逆転現象が生じてしまった。つまり、「七一」は日付として根拠が怪しかったにもかかわらず、その日が党の定めた記念日であるからには、何としてもそれを創立の日付にしていこうという努力がなされたのである。

その一例は、陳潭秋の書いた第一回大会の回想録にみられる。前述のように、陳潭秋の回想録「第一次代表大会的回憶」は、党創立一五周年にあたる一九三六年に執筆され、『共産国際』（『共産主義インターナショナル』）というコミンテルンの刊行物に掲載されたものである。『共産国際』はモスクワで発行されていた中国語刊行物だったため、その流通範囲は必ずしも広くはなかった。また、陳潭秋自身も人民共和国の成立を見ることなく獄死（一九四三年没）しているため、第一回大会にかんする重要な回想録でありながら、容易には見られない資料となっていたのである。それが人民共和国になって再発見され、一九五二年に雑誌に紹介されるという

ことになった。ただ、中国国内で再発表された陳潭秋の回想には、奇妙なことに、何カ所かにわたって、断りのない改変が加えられていた。

前述のとおり、本来の陳の回想録には、大会の代表たちが上海に集まってきたのは一九二一年の「七月下旬」で、大会は「七月末」に開催されたと書かれてあったのだが、なぜかこれが一九五二年に歴史資料として復刻された際には、「七月下旬」が「六月下旬」と改変され、大会は「七月初め」に開催されたと書き換わっているのである。一カ所だけなら誤植とも考えられるが、二カ所が符節を合わせたように書き換わっているのだから、これは、本来「七月末」の開催としか読みようのない資料を、強引に「七月初め」に大会が開かれたことを証明する資料に「改竄」したもの、としか考えられない。ちなみに、この改変版の回想録を掲載したのは、一九五二年に創刊された『党史資料』という雑誌の第一号であった。この雑誌は決して一般向けのものではなく、共産党の歴史を研究するごく一部の専門家向けに発行された内部図書である。そのような場で、資料の断りのない改変がなされたのだから、もとの『共産国際』版を見ることのできない多くの専門家は、この資料を「七月一日に第一回大会が開かれた」ことを裏づけるものと考えたことだろう。

これと同じ手口の日付の改変はこれにとどまらないが、紹介しだすとあまりに瑣末になるので、ここではいちいち挙げない。要は、この時期、第一回大会の日付を「七月一日」とする歴史資料がないのなら、「七月一日」にする資料を作り出そうという本末転倒の努力までなされ

たということである。

## 新文書の発見

党創立の日付が、定説の上でも、またいささか強引ながら「資料」の上でも、七月一日に落ち着こうとしていた一九五〇年代の末、関係者のそれまでの努力を水の泡にする新資料が見つかった。一九五七年に、「コミンテルン駐在中共代表団アルヒーフ」、つまり中国共産党がかつてモスクワに代表部をおいていた時に蓄えていた資料群二万点余りが、ソ連共産党中央から中国共産党に返還されたのだが、その中のあるロシア語文書に、第一回大会は七月二三日に開催されたと記されていたのである。その文書は第一回大会の直後に作成されたものとみられ、ここに長らく不明だった第一回大会の日付は、モスクワから返還されてきた一枚の紙によって、七月二三日というそれまでとは違う日に措定せざるをえなくなったのだった。

ただし、それまで七月一日にあれほど固執し、また記念行事も「七一」と銘打って行ってきた中国共産党にとって、党の創立記念日の変更は、その威信にもかかわることだけに、簡単にふみ切れることではなかった。これまで、欽定版の党史においても「七月一日」と明記してきたのに、ある日突然、「モスクワから新しい資料が出たので」という理由で歴史を書き換えるというのでは、いかにも不面目である。かといって、党の創立記念日をこっそりと変えること

などできるはずもない。かくて、モスクワから来たこの新文書の存在は、五〇年代末には党の指導者に報告され、毛沢東や董必武といった要人はこの文書を見ていたようだが、その後一九八〇年代になるまで、公表されることはなかった。文書の鑑定を求められた董必武は、その文書を「秘密文書、国家機密」と呼んだが、それは「七一」が、当時の彼らにとって、犯してはならないものであったことを推測させる。記念日も歴史書の記述も、七月一日のまま、変更されることはなかった。

かくて、中国国内では、その後に文化大革命という政治の大動乱が起こり、党史研究が停止したことも手伝い、七〇年代の終わりまで、七月一日をめぐる議論は起こらなかったが、国外の事情は逆だった。中国共産党の歴史は、中国の新たなる支配者の歩みとして、一九四九年以降、世界の中国研究者の新たな関心事となりつつあった。当然に、その出発点にあたる第一回大会の具体的状況も、史家によって少しずつ解明されていったが、その過程で、第一回大会の日付は中国共産党のいっている「七一」とはどうも違うらしいことがわかってきたのである。当初、モスクワの文書こそ知られてはいなかったものの、第一回大会をとりまく関係資料を丹念に並べていくと、「七一」では説明のつかないことは明らかだった。

中国での定説にとりわけ激しく反発したのは、中国共産党にとっての敵対勢力にあたる反共史家である。彼らは、「七一」説が資料的に成り立たないにもかかわらず、共産党の側があくまで「七一」を創立記念日としていることに、痛烈な非難を浴びせた。その代表的なものが、

一九七三年に台湾の学者が言い放った次のセリフである。「中共はもう五二歳になるが、一体いつ生まれたのかもハッキリさせていない。それはちょうど、親もわからぬ私生児がかってに誕生日を教えられたようなものである」。共産党は出自からして怪しいではないか――それが彼ら反共史家の言い分だった。これに類する海外からの悪口は、とりわけ文化大革命の間は止むことはなかったが、皮肉にも、こうした罵詈雑言が、のちに中国国内で党史の研究が再開された際、中国の学者の発奮材料になったという。つまり、文化大革命が終わって改革・開放路線になった直後、学術的な態度で党史の史実考証に着手した中国国内の学者たちは、先の台湾学者の誹謗を片時も忘れることなく、それこそ臥薪嘗胆して研究に打ち込んだというのである。

一九八〇年代に入り、ようやくモスクワから返還された文書が公開された。実は、第一回大会関連の文書は、中国が鎖国のごとき体制をとっていた一九七〇年代に、ソ連の学者が同種のものをモスクワで発見、学術誌に公表しており、国外で関心をもつ学者はその存在をとっくに知っていたのだった。いわば、中国だけがそれを「国家機密」扱いしていたわけだが、それはそれとして、こうした中国国内での文書の公開や資料の発掘によって、八〇年代に中国での研究が大いに進展したことは事実である。この時期、中国共産党の歴史研究は、多くのタブーにがんじがらめにされていたそれまでの状況から、かなり自由になったが、その意味では、第一回大会の日付もタブーの領域から解放され、くだんのロシア語文書にもとづいて、七月二三日開幕とされるようになっていった。現在の中国共産党の公式歴史では、一九二一年七月二三日

に第一回大会が開催されたことが、明確に記されている。
むろん、歴史をこのように確定したために、記念日と史実とは一致しなくなってしまったが、それについては、共産党は次のように説明し、七月一日をあくまで記念日としている。

党の創立記念日は、第一回大会が開幕した日にちではないが、数十年来、「七一」という光輝ある日はすでに全党、全国各民族の人々の胸深くにしっかりと刻み込まれている。したがって、党の創立記念日を変える必要はまったくない。（李樾「関於党的誕生紀念日和党的一大開幕日期」一九八三年）

現在、「七一」が相変わらず党の創立「記念日」であるのは、このような事情によっているのである。

## 思い出せない苦悩

「七一」をめぐる記念日の歴史をたどれば、これで話は終わるわけだが、最後に、あの日、あの場所で党の第一回大会に立ち会った人々とこの記念日とのかかわりには、ひと言ふれておかねばならないだろう。彼ら、つまり董必武、李達、包恵僧、劉仁静の四人こそは、一九四九

年以降のその後半生に、それぞれの置かれた四様の立場で、あの日のことを思い出し、その記念日に向き合わざるを得なかったという運命を背負った人々だからである。

すでに述べたように、一九四九年以降、「七一」は単に記念日であるばかりでなく、それは大会の開催された日付であるという理解が定着していくわけだが、中国共産党の歴史統括部門、あるいは第一回大会の関係者のあいだでは、大会の日付は七月一日ではなかったようだということが、一部にささやかれていたようである。ただし、七月一日でないならいつなのかということを確認するすべはなかったため、その四人に対しては、くり返しインタビューを行い、何とか日付、あるいは日付の手がかりになるものを思い出してもらおうという努力が試みられた。早い話が、この四人は一九四九年以降、同じことを死ぬまで何度も聞かれたのである。

彼らが感じたプレッシャーの大きさを、今日の感覚で説明するのは難しい。現在ならいざ知らず、当時は「天大なり、地大なりといえども、党の恩情の大なるに如かず」（流行歌「爹親娘親不如毛主席親」のフレーズ）とまじめに信じられていた時世なのである。むろん、インタビューをする側は、関係者が具体的な日付をある日突然に思い出したりすることなど、内心では期待してはいまい。また、人間の記憶力にはおのずから限界があるのだから、三〇年も前のある会議の、場所や顔ぶれならいざ知らず、最も記憶に残りにくい日付など、そもそも思い出せるほうがおかしかろう。現に彼らはインタビューの中で、日付に限らず、しばしば「ハッキリとは思い出せない」と答えている。だが、彼らにしてみれば、思い出さなければならないの

は、極端な話、自分や家族の誕生日よりもはるかに大事な党の誕生日なのである。人民共和国に生きている身でありながら、それも栄えある党の第一回大会に出席するという稀有な体験をしながら、なぜ党の誕生日を覚えていないのかという叱責の声が、どこからともなく聞こえてきたであろう。むろん、その四人は、「あの日の会合が歴史に残る日になろうとは思いもしませんでした」などと言えるはずもなかった。彼らの一九四九年以降の社会的立場の違いは、回想にどのような影響をもたらしたのだろうか。

## 董必武

四人のうち、一九四九年以降で最も社会的地位が高かったのは、いうまでもなく、終始党を離れることなく生涯を全うした董必武（図3）である。科挙を受験したこともある彼は、年齢やそれまでの活動歴からして、一線で党を指導するというより、むしろ党の長老格として、最高人民法院院長など名誉職を多く歴任した人物で、人民共和国副主席までつとめた。四人の中では、まだ比較的気楽な立場で第一回大会の模様をふり返ることができたといえるだろう。

彼の大会期日についての言及としては、一九二九年暮れの何叔衡あて書簡と一九五六年の新聞談話が代表的なものである。董必武は、前者では大会の期日を「七月（?）」（カッコ内の?は董必武のつけたもの）と述べていたが、後者では、「党の第一回全国代表大会は一九二一年七月

図３　董必武

一日に開かれました」と述べている。「七月あたりか」というぐらいしか記憶になかったのに、それが二十数年もたってから「七月一日」へと記憶がよみがえったとは考えにくいし、一九五六年といえば、中国では七月一日に大会が開かれたということが、すでに史書の上でも定着していたわけだから、董はそれを忠実になぞる形で談話を出したと考えられる。

　さて、董必武は、その地位ゆえに、前出のロシア語文書（二三日開催と伝えるもの）が発見されると、それをいち早く見られる立場にあった。そのロシア語文書は、共産党の歴史文書を所蔵・管理する中央档案館の専門家が発見してのち、ただちにそれを翻訳して董必武に鑑定を仰いだのだが、一九五九年にその文書を見た彼は、それが比較的確かなものであるということを前置きしながらも、「結局のところ、二三日なのか何日なのかは確定できない。我が党はすでに『七月一日』を党の第一回代表大会の開幕日と決めているのだから、変えなくてもかまわないと思う」とコメントしていた。また、文化大革命のさなかである一九七一年には、党史研究者などごく内輪の人々との座談会の場で、「七一」にふれ、「七月一日という日付も、後で決められたもので、本当に大会を開いた日付はそうとはいえないものです」とも述べている。つまり、歴史を研究

する人たちに対しては、「七一」が史実の日付ではないということを内々に告げる一方、七月一日に第一回大会を開いたということは党が決定しているのだから、新文書が出たからといって変える必要はないと言っていたことになる。

人民共和国での「七一」の扱いが、大枠でこの董必武の見解のとおりに推移したことを考えると、彼は、ハッキリは思い出せない（確定できない）、だが、党がそう決めているのだからそれに従おうという現実的で柔軟な対応をしたといえよう。

## 李　達

董必武が党の長老として、比較的柔軟な対応ができたのに対して、李達、包恵僧、劉仁静の三人は、いずれも共産党を離党した経歴の持ち主だけに、人民共和国で自分の発言が引き起こすだろうさまざまな波風を予想すると、おのずとその言動は慎重にならざるをえなかった。

なかでも、かたくなといえるほど同じ言葉をくり返したのが李達（図4）であった。彼は、第一回大会に上海の代表として参加した人物だが、一九二三年に党活動が学究肌の自分には合わないことを感じて共産党を離れた。その後、教育・著述方面の仕事につき、一九四九年に中華人民共和国が成立する段になって北京を訪れ、毛沢東の勧めで共産党に再入党した。その後は、毛沢東思想の研究を進める一方で、湖南大学校長、武漢大学校長など、教育界の要職を歴

図4　李達

任している。

李達は再入党の際、毛沢東から直接に、「若い頃に党を離れたというのは、政治的には転んでしまったというわけだから、大きなマイナスだ。だが、昔のことはもう咎め立てはしない。大事なのはこれからだ」と励まされたこともあり、また、離党という暗い過去を振り払うために、全身全霊を共産党のために捧げた愚直な人物だった。彼の第一回大会に関する回想にも、そうした努力がかいまみえる。彼の大会についての最も早い時期の言及は、一九二八年に書いた文章のもので、「民国一〇（一九二一）年夏に、第一回代表大会が召集された」というごく簡単なものだった。それよりくわしい言及はない。ところが、それから二〇年後の一九四九年に再入党の申請をした際、党に提出した自己経歴書の中では、第一回大会について詳細な記述をしていた。期日に関しては、「七月一日午後七時、上海貝勒路同益里の李漢俊の寓居で、第一回会議を行った」と述べ、日付だけでなく時刻までもハッキリ証言していた。ちなみに、共産党の第一回大会は、途中で警察側の妨害が入ったため、最終日は場所を南湖という景勝地の遊船に移して行われたのだが、その時間についても、彼は「午前一〇時から午後六時まで」とこれまた克明に記している。

ただし、先の董必武と同じく、漠然と「夏」に大会が開かれたというほどの記憶しかなかった李達が、二〇年を経て、記憶がまざまざと蘇ってきたということはありえない。思い出したその日付が、ほかでもない「七月一日」だったということにハッキリと表れているように、自己経歴書での李達の回想は、そのころに共産党の中で確定しつつあった「七月一日説」を自主的に摂取し、自分の記憶をそれに添う形に再構成したものなのである。李達は、一九四九年以降も、記録の残っているものだけでも、二、三年に一回、インタビューを受け、そのたびに第一回大会の模様を証言することになるが、七月一日という日付だけは一貫して変えなかった。一九五一年の証言では、開会の時間が午後八時へ一時間ずれているが、七月一日の夜に開かれたという点は譲っていない。その後の回想の変化をたどると、細かい点が現在の定説にだんだん近づいていること(例えば、大会場所の李漢俊邸の地番が、貝勒路同益里から貝勒路樹徳里へ、さらに望志路樹徳里三号へ変化)が確認される。これは、それぞれの時期の研究の成果を、彼自身が学びとり、それを自分の回想の中に生かしていったということを示していよう。

李達は亡くなるまで、大会は七月一日だったと言いつづけた。一九五九年の回想は、前出のロシア語文書を見せられた際の回想だが、インタビュアーがその文書を示しながら「本当に七月一日でしたか」とたずねたのに対して、李達の回答はそれでもなお、「第一回大会開会の具体的な時間は、七月一日です」という頑固なものだった。さらに、彼はロシア語文書はあまりあてにはならないとも付け加えている。彼の場合は、新文書がいう二三日かもしれないが、党

が決めている以上やはり七月一日でよかろう、と言った董必武の如き悠揚な対応ではなく、誰が何と言おうと、第一回大会の日付は七月一日以外にはありえないのであった。李達が、党員たることを貫くため、党の定めた歴史から一歩も外へ出ないよう意図的に自制したのか、あるいは学習によって学びとったものが、何度もくり返しているうちに、ついに自分の記憶の一部になってしまったのか、これを判断するのは難しい。両者は実は一体の心性だからである。

李達は社会科学理論や毛沢東思想の研究者としても著名な人だったが、残念ながら文化大革命が始まった直後に、「ブルジョア学者」「叛徒」というレッテルを貼られ、迫害の中で亡くなった。記憶の中まで党の方針と一体となった真摯なる再入党者の非業な最期であった。

## 包恵僧

董必武、李達が共産党の公式見解に近い証言をくり返したのに対して、そこからややずれた対応をしたのが包恵僧（図5）である。包も離党組であるが、彼の場合は、革命闘争が厳しい状況に追い込まれ、身の危険を感じて活動から足を洗ったという意味で、保身的な離党だったといえよう。のち、国民党、あるいは国民政府の官界で官吏となり、人民共和国成立後は中国に残ったが、そうした前歴があるため、李達のように再入党することはなかった。その点では、李達らとは違って、党の方針や既存の歴史記述からやや距離を置けたといえなくもない。包恵

僧がほかの三人に比べて格段に多い回想録を一九五〇年代から発表したのは、根っからの話し好きという彼のパーソナリティだけでなく、そうした彼の立場もいくぶんか関係しているように思われる。

包恵僧とて、一九五〇年代に第一回大会をふり返ったときには、大会の期日を思い出せるはずはなかった。だが、彼が李達らと違ったのは、「七一」を尊重しつつも、それに縛られることなく、自分たちの当時の足どりに照らして思いをめぐらした点だった。一九五三年に党の歴史部門の専門家の訪問を受けたさい、実は日付が確定できずにいるという率直な言葉を聞いた彼は、「大会の時期は、学校が夏休みになって間もなくだったので、おおよそのところ、七月一〇日前後だったと思う」と答えている。ただし、この見解は当時の定説とは食い違うものだったし、七月一〇日前後というだけでは、根拠も不足していたため、彼が一九五七年に「棲梧老人」の筆名で、公刊の雑誌に回想録「中国共産党成立前後的見聞」を発表したさいには、この異論を発表することは慎重に差し控えられた。大会の期日については、「それぞれの学校が夏休みに入った後」という文言だけの曖昧な表現にされ、具体的な日付は盛り込まれなかったのである。当時は

図5　包恵僧

「七二」説が通行していたわけだから、このこみ入った事情を知らぬ一般読者は、期日が書かれていないということは、「七二」に開催されたことを暗黙の前提にしているのだろうと感じたにちがいない。

文化大革命の時代、包恵僧も他の離党組と同じように辛酸をなめたが、幸いにしてその歳月を生きのび、改革・開放の時期に再び回想録を執筆する幸運に恵まれた。一九七八年、文革が終わり、少しは自由に回想を語れるようになった段階で、彼は今一度記憶を整理し、次のように述べている。「自分の記憶では七月一日ではなく、七月半ば前後、ちょうど夏休みになった頃だった。そうでなければ中学校で教師をしていた陳潭秋や董必武は会議には出席できなかった」と。当時、彼にインタビューをしたのは、ロシア語文書などの新資料を利用して第一回大会の史実を明らかにしようとしていた党史研究者であったから、この時点で包は、文書記録では七月二三日開催となっていることを知っていたにちがいない。彼の回想が、翌一九七九年になって「七月二〇日前後」とさらに後ろにずれるのは、今度はその新史実となった日付に自らの記憶を合わせていった表れだろう。

## 劉仁静

劉仁静（図6）も離党組ではあるが、李達や包恵僧らと異なり、革命についての自らの主義・信念を貫徹するために、共産党と袂を分かったトロツキストであった。一九二〇年代から三〇年代の中国共産党は、モスクワ、具体的にいえば、スターリンらソ連指導者の意に従う革命路線をとっていたが、劉はそれに異議を唱え、トロツキーの主義にもとづいて中国の革命を進めようと考えたのだった。中華人民共和国の成立は、間接的に彼らトロツキストの運動が破

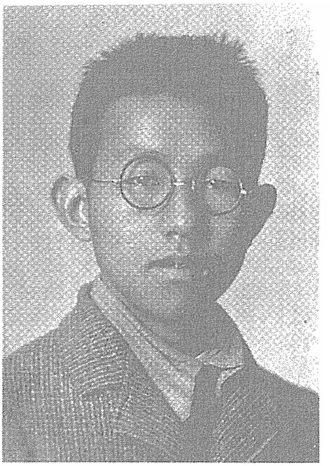

図6　劉仁静

産したことを意味したが、とはいえ、一概に反革命、反共産主義とは決めつけにくいだけに、共産党の歴史では扱いの難しい人物といえる。ただ、共産党員時代からそこそこ名の知れていた人物でもあり、それまでの政治的見解を清算しないことには、かれが人民共和国の体制のもとで暮らしていくことは難しかった。トロツキストのなかには、一九四九年以降も転向を拒み、そのまま獄に繋がれた者もいたが、劉仁静は一

九五〇年末に『人民日報』に自己批判の声明を発表し、自らの「誤り」を認めることになる。その後、人民出版社に籍を置いた彼ではあったが、その立場は、獄にこそ繋がれてはいないものの、準政治犯であったといってよい。他の当事者に比べ、党史研究者が彼のもとを訪ねてインタビューをすることは少なく、また彼自身も発言にはことのほか慎重で、多くを語ろうとはしなかった。文革終結後に劉にインタビューを行った中国の研究者・邵維正氏は、劉の様子を次のように伝えている。

劉仁静へのインタビューは容易ではなかった。やっとのことで白雲路にある彼の新居を訪ねあてたとき、この老人は黙して語らず、萎縮した様子で、私がしたいくつかの質問についても、判で押したように、「もう歳だから、よく覚えていない」と答えるばかりだった。落ち着いて考えてみれば、それも理解できた。劉老人の一生は不遇の連続、辛酸をなめ尽くしていたから、何事にもびくびくしていたのだ。とりわけ、歴史や政治にかかわる問題については、小心翼々そのもので、それが、口を開きたがらない内面的な理由だっただろう。

その劉仁静は、実は一九五七年時点で、インタビュアーから包恵僧の回想を聞かされ、「包恵僧は第一回大会の開催は七月ではあったが、一日とは限らないと言っているそうだが、その説は正しい」と語ったことがあった。七月一日ではないということをうすうす感じていた劉仁

静は、包恵僧の言に励まされる形で、その考えを伝えていたということになる。ただし、その後の文化大革命で、彼はトロッキスト・反党分子という前科を蒸し返されて、十一年間にわたって獄に繋がれることになった。先の引用文の伝える彼の様子は、一九七八年暮れに釈放されて間もないころのもの（名前も劉亦宇と変えていた）なのである。

その後、彼は、「もう時代は変わった」「回想が政治問題になったりすることはない」とくり返し説得され、ようやく重い口を開きはじめた。そして、インタビューに訪れた邵維正に、大会期日についての思わぬ手がかりを与えた。自分は共産党の大会の前に、南京で開かれた少年中国学会という青年団体の大会に出席したはずだ、と述べたのである。邵維正が調べてみると、少年中国学会の大会は、確かに南京で開かれており、出席者の名簿には劉の名があった。そして、その大会の開幕日は奇しくも七月一日だった（ただし、劉が南京に到着したのは二日）。これによって、劉が出席した上海での共産党の大会は、それよりも後であることが、裏づけられたのである。

当時は、邵氏らがロシア語文書などによって、大会の日付を二三日に間違いないとほぼ断定していた時期であるから、客観的にみれば、劉仁静の証言のインパクトはもう大きくはなかった。しかし、劉仁静は、邵維正が少年中国学会の記録を見つけてくれたことに刺激を受け、封印してきた記憶を解き放つ勇気を与えられた。晩年の彼が残した回想録「一大瑣憶」（一九七九年）がそれである。それは文字どおり、第一回大会についての思い出の記ではあるが、氷の

ごとく閉ざされていた心が一瞬の明るさを取りもどすという意味では、ある離党者の人間性回復の記録でもあった。

## 記念日と記憶

ある日、ある場所に居合わせたために、あるいはある特異な体験をしたために、人生が変わることは珍しくない。それが良からぬ結果を招いた時、人はしばしばそれを「人生を狂わせた偶然」と呼ぶ。では、第一回大会に参加したがゆえに、はからずも後世にそれをめぐる苦労を味わった人々も、それにならって、「人生を狂わされた」人々と呼んでよいのだろうか。確かに彼らは苦労をしたが、それを単に党の第一回大会に参加したがゆえに、あるいは中華人民共和国に残ったがゆえに、と考えるのは結果論であろう。彼らの苦労の根源は、そんな歴史の偶然にあるではない。彼らの苦労は、小は個人や政党が、大は国家や民族が、そのアイデンティティを往々にして歴史の中にもとめ、その際、おのれの意義を確認する最も簡単（安易）な方法が、「記念する」という行為になるという仕組みに発しているのである。

いうまでもなく、記念日というものは、自然に生まれてくるものではなく、つくられるものである。作為色が濃い場合もあれば、薄い場合もある。だが、我々は記念日を祝うとき、過ごすとき、実は記念日というものは誰かがつくったものであることを往々にして忘れてしまう。

あるいは気づかないふりをしてしまう。「記念日は作り物だ」と声高に叫ぶことは、「記念日」によって結びつけられている共同体へのある種の反逆行為になるからである。だから、ある社会で心地よく生きるためには、「記念日」に従順であるほうがよい。「記念日」があなたの記憶を侵蝕しない限りは。

中国共産党の第一回大会に出席した人々は、すでに全員がこの世を去った。彼らの人生をふり返って、それを「記念日」によって記憶を侵蝕された人々と呼ぶことは可能だろう。それはいわば、遠い中国の話だが、ひるがえってわたしたちはどうだろう。つくられた「記念日」に縛られてはいないだろうか。自分の記憶や経験が「記念日」によって侵蝕されてはいないだろうか。反問してみると、「七一」をめぐる彼らの回想の転変や、かたくななまでの思いこみは、他人事には思われない。


参考文献

石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、二〇〇一年。

王暁葵「二〇世紀中国の記念碑文化――一九世紀広州の革命記念碑を中心に」、若尾祐司、羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史――史誌・記念碑・郷土』名古屋大学出版会、二〇〇五年。

小野寺史郎「民国初年の革命記念日――国慶日の成立をめぐって」『中国――社会と文化』二〇号、二〇〇五年。

邵維正「板凳需坐十年冷　文章不写一句空——対中共一大考証的回憶」『中共党史研究』二〇〇〇年第四期。
丸田孝志「時と権力——中国共産党根拠地の記念日活動と新暦・農暦の時間」『社会システム研究』第一〇、一一号、二〇〇五年。
李樾「関於党的誕生紀念日和党的一大開幕日期」『党史通訊』一九八三年第一九期。